

第3章 全国学力・学習状況調査データの分析(1) 家庭の社会経済的背景と学力等の関連

比嘉 康則

とよなか都市創造研究所 研究員

<目次>

1. 本章の内容
2. 家にある本の冊数
3. 家庭 SES と学力
4. 家庭 SES と生活習慣
5. 家庭 SES と学習時間
6. 家庭 SES と学習方略
7. 家庭 SES と授業
8. 家庭 SES と学力と学習状況
9. 結果のまとめ

1. 本章の内容

本章では、豊中市における家庭の社会経済的背景（SES）と学力などの関係について分析する。全国学力・学習状況調査では、家にある本の冊数（蔵書数）を児童生徒質問紙でたずね、それを家庭 SES の代替指標としている。本プロジェクトにおいても、まずはこの代替指標を用いて家庭 SES と学力や生活習慣、学習状況などとの関連を分析し、豊中市における学力面での格差の現状を検討したい。

注意点を述べておくと、以下の分析で示されるのはあくまでも全体の傾向である。たとえば、「家庭 SES が厳しい児童の国語の平均正答率は〇%」といった数字は平均を示しており、それ

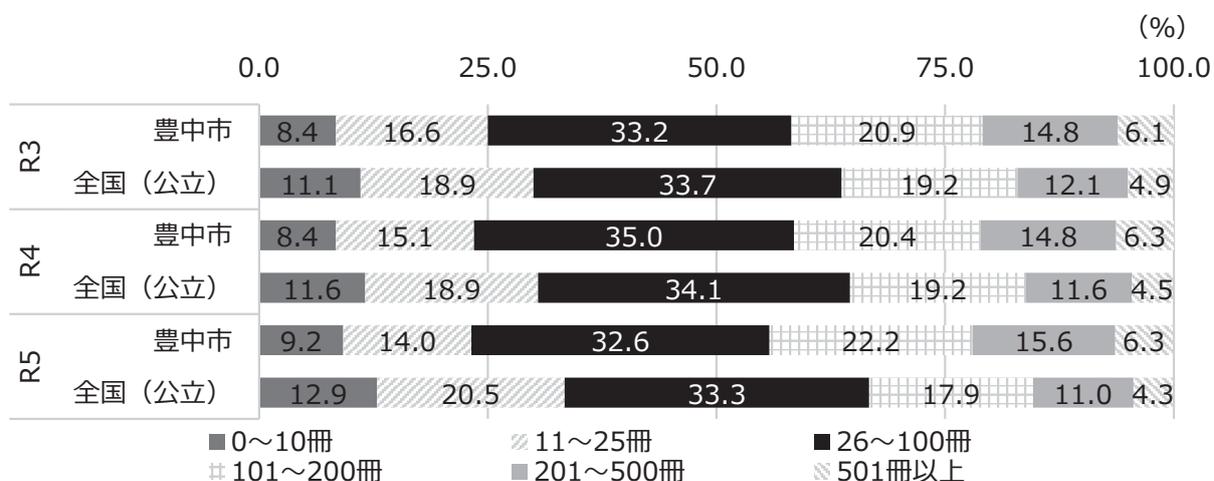
より平均正答率が高かったり低かったりする児童はもちろんいる。家庭 SES により個々人の学力などが完全に決定づけられているわけではなく、児童生徒一人ひとりの資質やおかれた環境、偶然などによる多様性がある。それでも全体を俯瞰すると一定の傾向がみられ、そこにはチャンスの差が確認できる。そのような観点で解釈していただきたい。

2. 家にある本の冊数

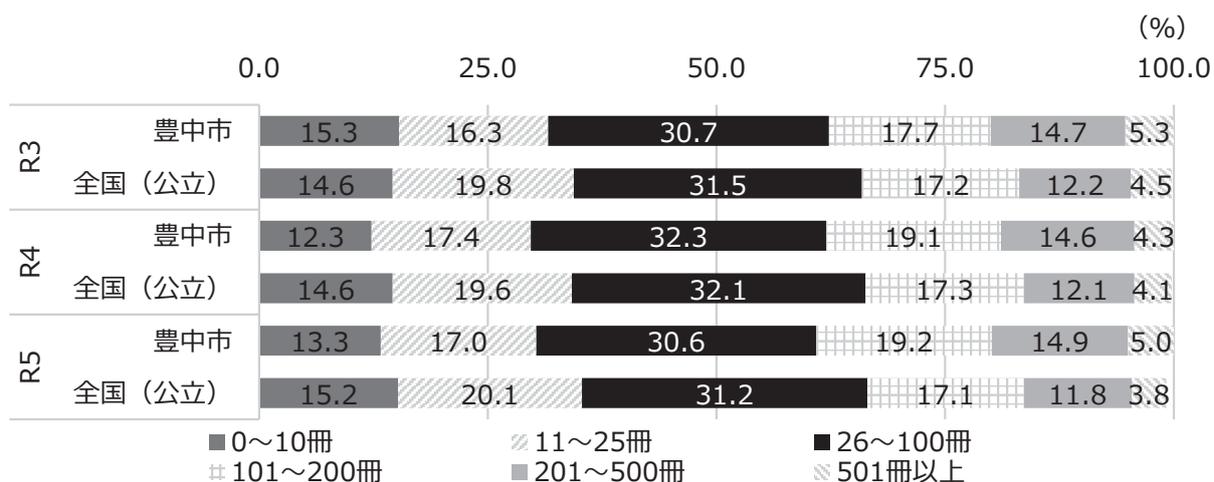
分析に先立ち、まずは家にある本の冊数の回答状況を確認しておきたい（図表 3-1、3-2）。これを見ると、小学校・中学校調査ともに、家にある本の冊数の構成割合に大きな変動はなく

調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究

安定している。また、豊中市は全国（公立）に 比べ家にある本の冊数が多い傾向にある。



図表 3-1 家にある本の冊数（小学校）



図表 3-2 家にある本の冊数（中学校）

子どもパネルデータを構築するなかで収集した就学援助のデータを用い、家にある本の冊数との関連を確認してみたい。令和5年度（2023年度）の全国学力・学習状況調査から得られた「蔵書数10冊以下の児童生徒の割合」と、「就学援助を受けている児童生徒の割合」をそれぞれ学校別に集計し、両者の相関係数を計算すると、小学校は0.89、中学校は0.85となった。蔵書数25冊以下の場合の相関係数は、小学校は0.84、中学校は0.77である。いずれも強い

正の相関が見られる。つまり、蔵書数が少ない児童生徒の割合が高い学校は、就学援助率も高い傾向にある。家にある本の冊数を家庭SESの代替指標としてみることは、豊中市のデータにおいても問題ないと考えられる。

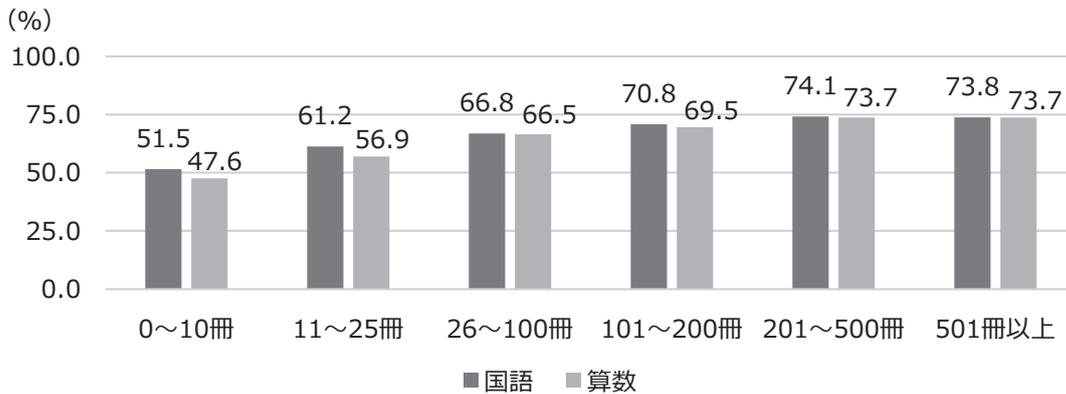
3. 家庭SESと学力

では、豊中市において、家庭SESと学力のあいだにはどのような関係があるのだろうか。

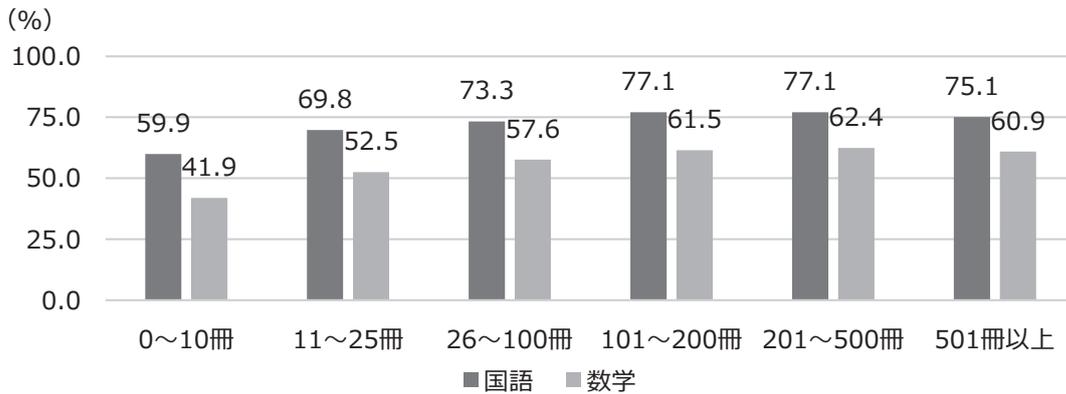
第3章 全国学力・学習状況調査データの分析 (1)

令和5年度(2023年度)のデータを用い、家にある本の冊数別に、国語と算数・数学の正答率を示したのが図表3-3と3-4である。小学校・中学校調査ともに、いずれの教科でも、家にある本の冊数が多いほど正答率が高い傾向が見ら

れる。グラフは省略するが、令和3年度(2021年度)と令和4年度(2022年度)の調査でも、同様の傾向が見られる。豊中市においても、家庭SESにもとづく学力格差があるといえるだろう。



図表3-3 家にある本の冊数×教科正答率 (R5・小学校)



図表3-4 家にある本の冊数×教科正答率 (R5・中学校)

4. 家庭SESと生活習慣

以下では、学力以外の項目との関連をみていく。まず、生活習慣との関連である。煩雑さを避けるため、以下では基本的に令和5年度(2023年度)の結果のみを示す。そのほかの年度も基本的な傾向は同様である。

図表3-5から3-8は、朝食を食べる頻度、就寝時間といった生活習慣と家にある本の冊数のクロス集計である。これを見ると、小学校につ

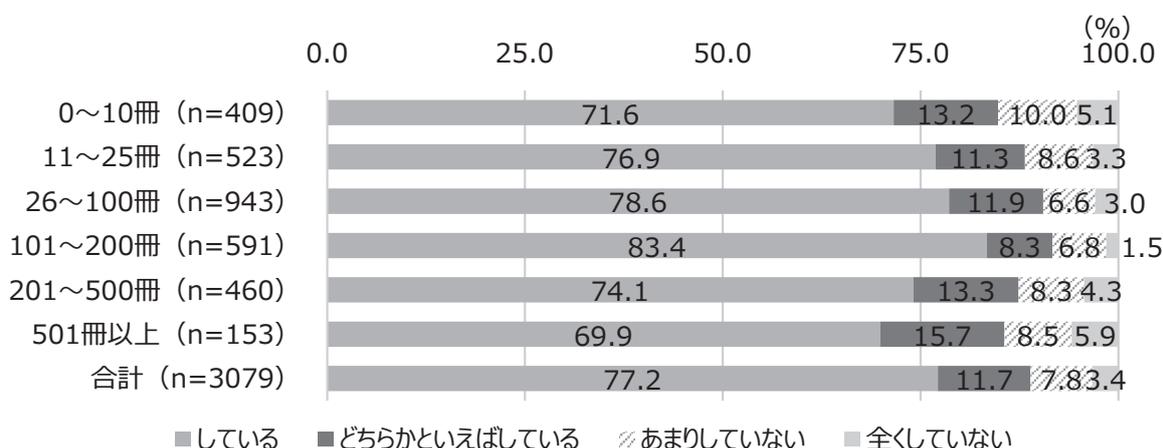
いては、特に蔵書数10冊以下の児童で生活習慣が安定しない傾向がみられる。生活習慣の不安定な児童は、SESが特に厳しい家庭に偏っている可能性がある。

一方、中学校については、蔵書数101~200冊の生徒でもっとも生活習慣が安定する傾向がみられる。生活習慣の不安定な生徒は、家庭SESが厳しい層とゆとりのある層の両方にみられる。

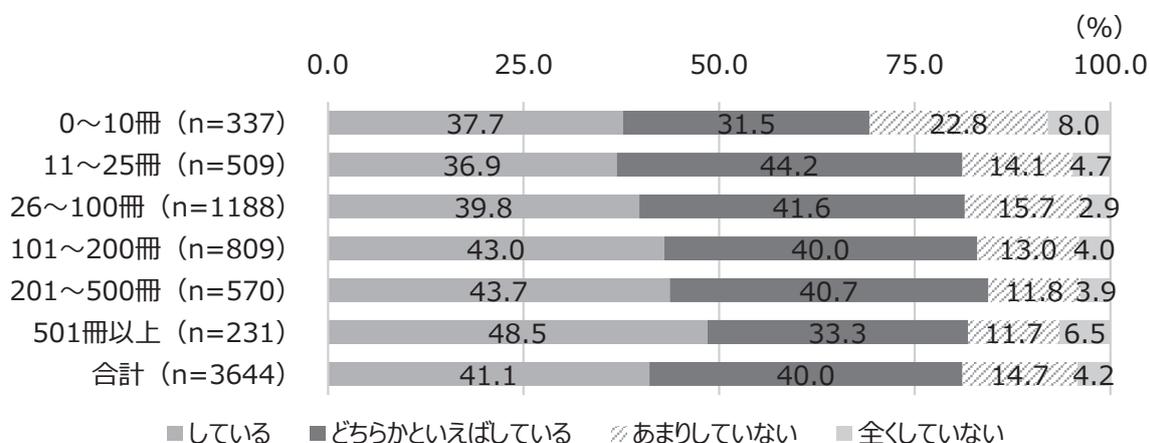
調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究



図表3-5 家にある本の冊数×毎日朝食を食べる (R5・小学校)

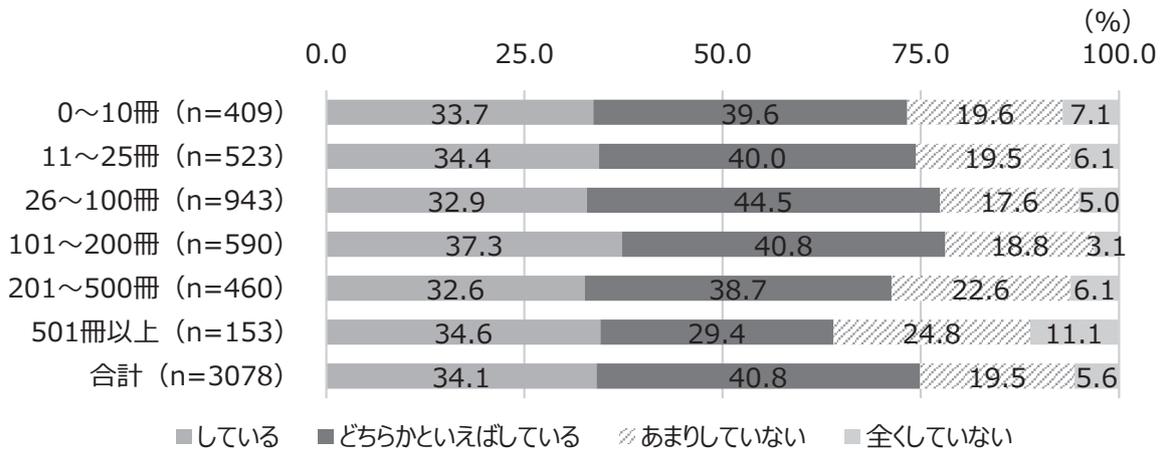


図表3-6 家にある本の冊数×毎日朝食を食べる (R5・中学校)



図表3-7 家にある本の冊数×決まった時間に寝る (R5・小学校)

第3章 全国学力・学習状況調査データの分析 (1)

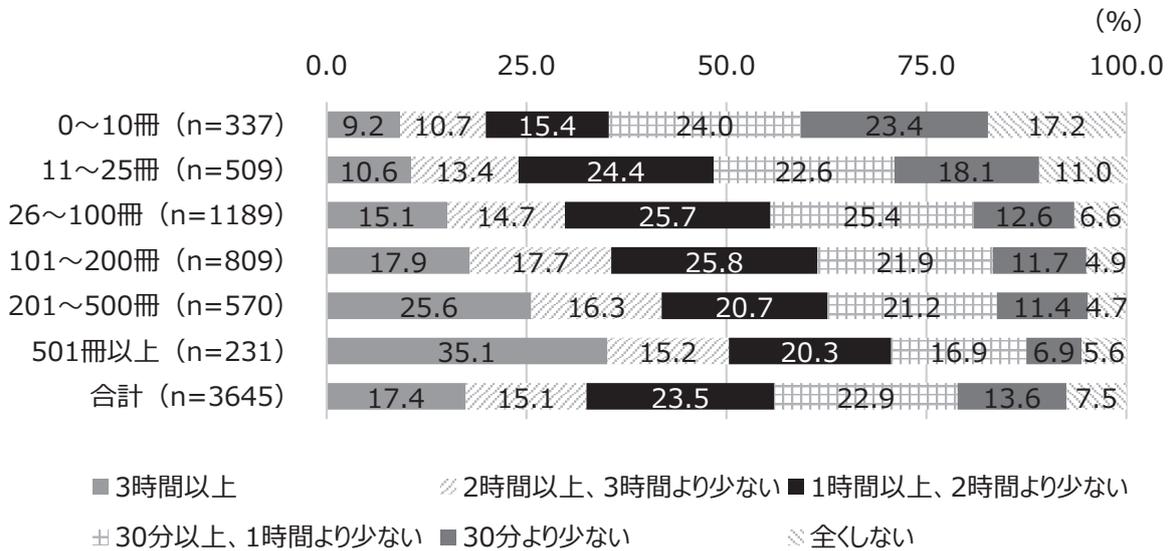


図表3-8 家にある本の冊数×決まった時間に寝る (R5・中学校)

5. 家庭SESと学習時間

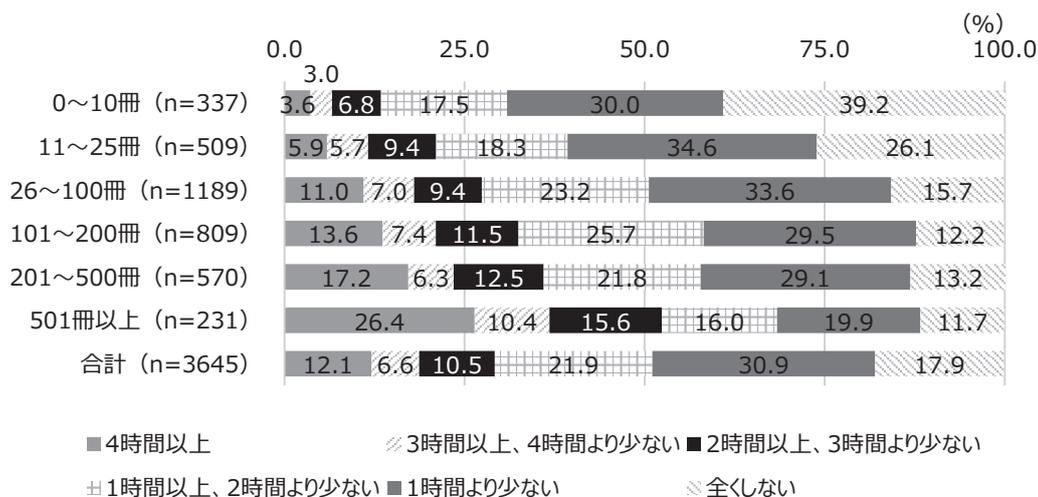
次に、家庭SESと学習時間の関連についてみる。図表3-9から3-12は、学校の授業時間以外の学習時間（平日・休日、学習塾で勉強し

ている時間や家庭教師に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間をふくむ)と、家にある本の冊数をクロス集計したものである。小中学校ともに蔵書数が増えるほど学習時間が延びる傾向がおおまかに読み取れる。

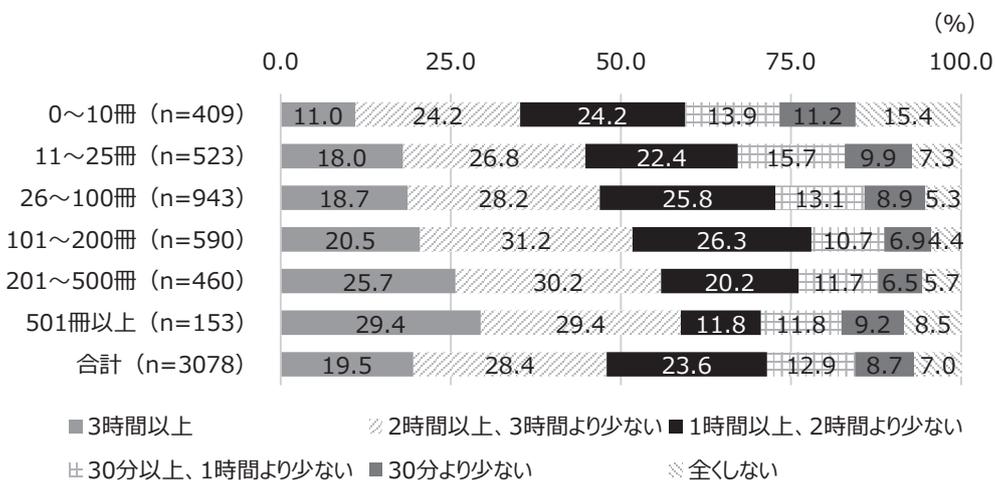


図表3-9 家にある本の冊数×平日の学習時間 (R5・小学校)

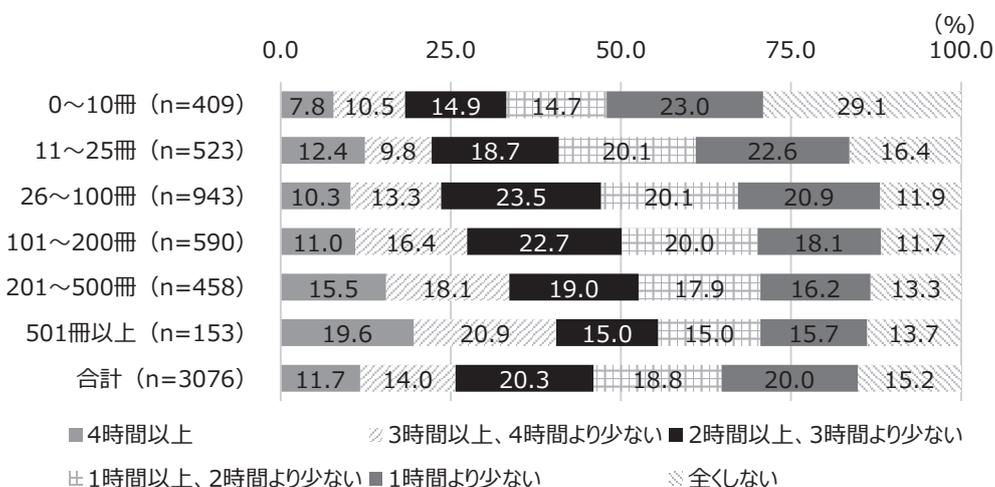
調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究



図表 3-10 家にある本の冊数×休日の学習時間 (R5・小学校)



図表 3-11 家にある本の冊数×平日の学習時間 (R5・中学校)

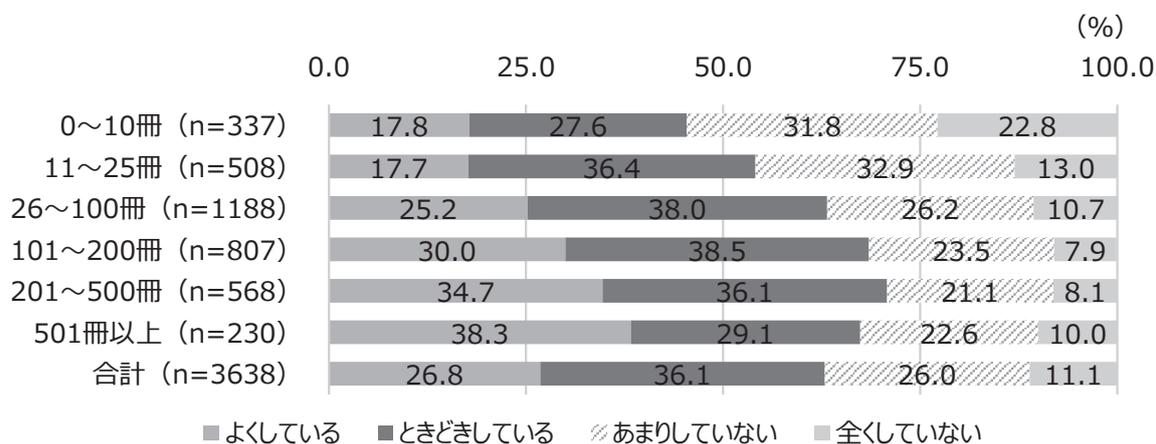


図表 3-12 家にある本の冊数×休日の学習時間 (R5・中学校)

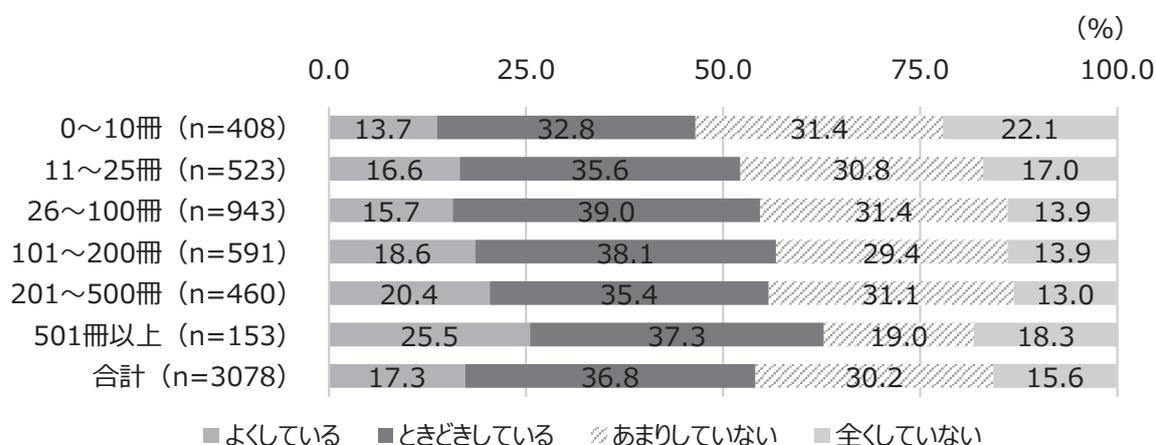
6. 家庭SESと学習方略

次に、家庭SESと学習方略（学習の仕方）についての関係を見る。図表3-13と3-14は、家で計画を立てて勉強をしている程度（学校の

授業の予習や復習をふくむ）と、家にある本の冊数のクロス集計である。小中学校ともに、蔵書数が増えるほど計画的に勉強する児童生徒の割合が増える傾向がおおまかにみられる。



図表3-13 家にある本の冊数×家で計画的に勉強 (R5・小学校)



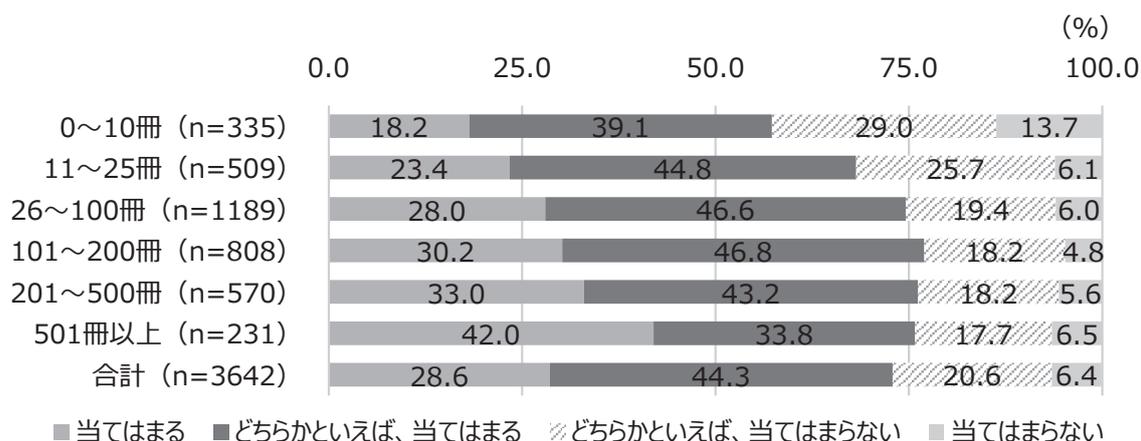
図表3-14 家にある本の冊数×家で計画的に勉強 (R5・中学校)

図表3-15と3-16は、「学習した内容について、分かった点や、よくわからなかった点を見直し、次の学習につなげることができている」かどうかをたずねた質問と、家にある本の冊数のクロス集計である。

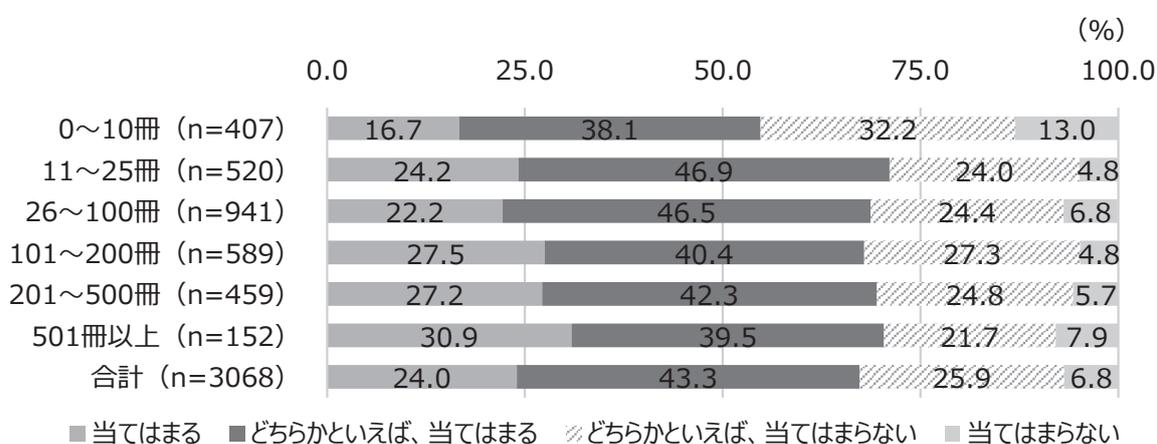
小学校では、蔵書数が多くなるほど「当てはまる」の割合が増える傾向がみられる。特に蔵

書数10冊以下の児童では、学習内容の見直しができている児童が3割強と多くなる。

中学校では、蔵書数10冊以下の生徒で「当てはまらない」と「どちらかといえば当てはまらない」の合計が4割半ばを占める。11冊以上になると、構成比はあまり変わらない。



図表3-15 家にある本の冊数×学習内容の見直し (R5・小学校)



図表3-16 家にある本の冊数×学習内容の見直し (R5・中学校)

7. 家庭SESと授業

次に、家庭SESと学校での授業の関連についてみる。現在の学習指導要領では、子どもたちに「学びに向かう力、人間性など」「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力など」といった資質・能力を育むため、「主体的・対話的で深い学び」といった考え方から授業を改善していくことが求められている。主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善は、以下のような視点を手掛かりに行われるものとされる(文部科学省 2017:77)。

- 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。
- 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。
- 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成

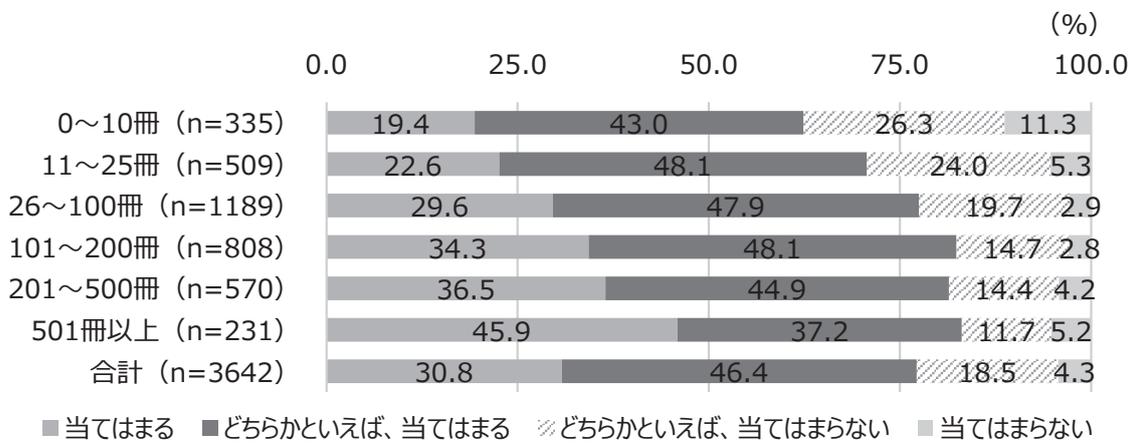
第3章 全国学力・学習状況調査データの分析 (1)

したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

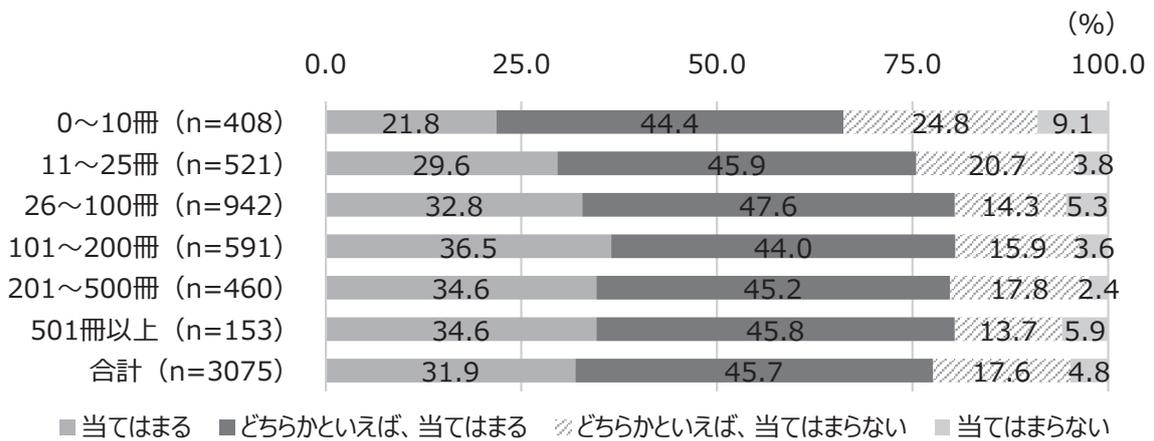
以下では、このような主体的・対話的で深い学びに関するいくつかの設問と家庭 SES の関係についてみる。

図表 3-17 と 3-18 は、「授業では、課題の解

決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」という設問と、家にある本の冊数のクロス集計である。小学校では、蔵書数が増えるほど、課題解決に向けた主体的な取組みを授業でしていると回答する割合が高くなる傾向がみられる。中学校では、特に 10 冊以下で「当てはまらない」「どちらかといえば、当てはまらない」の割合が増加し、蔵書数が 26 冊以上になるとあまり大きな差がなくなる。



図表 3-17 家にある本の冊数×課題解決に向けた主体的取組み (R5・小学校)

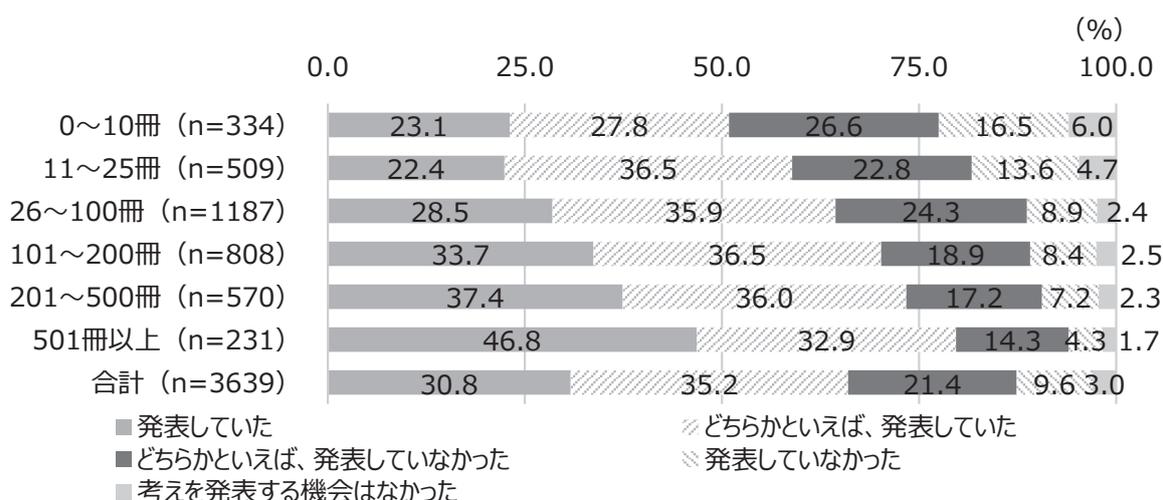


図表 3-18 家にある本の冊数×課題解決に向けた主体的取組み (R5・中学校)

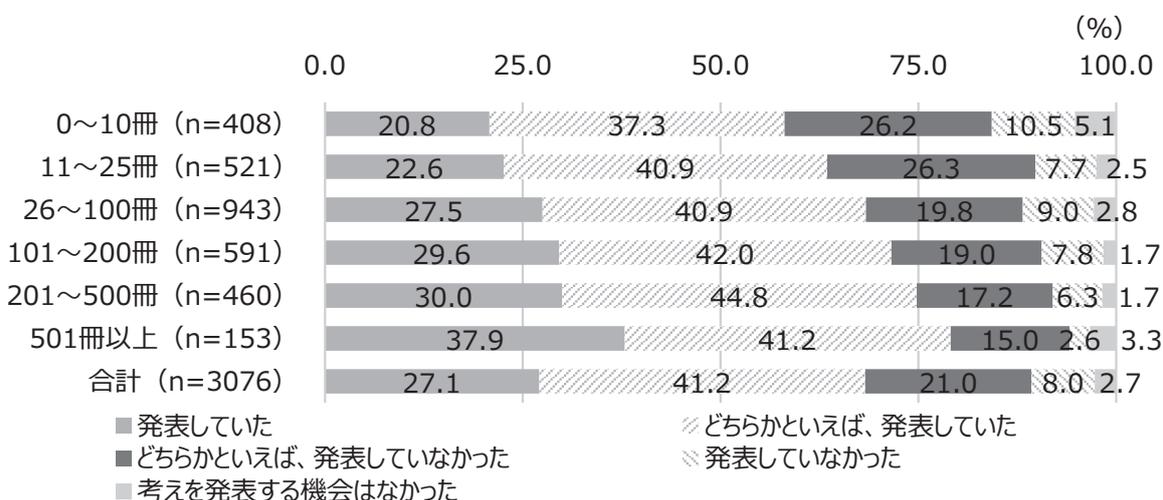
図表 3-19 と 3-20 は、「授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していた」の回答と、家にある本の冊数

のクロス集計である。小中学校ともに、家にある本の冊数が増えるほど、授業の発表時に工夫をしていると回答する児童生徒が増加する傾向がみられる。

調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究



図表 3-19 家にある本の冊数×授業の発表時に工夫 (R5・小学校)



図表 3-20 家にある本の冊数×授業の発表時に工夫 (R5・中学校)

以上のように、家庭 SES にゆとりがある児童生徒ほど、主体的・対話的で深い学びで想定される学習を授業で経験していると回答する傾向がある。ただ、以上のような結果は、個人単位の傾向というよりも、学校単位の傾向を反映している可能性もある。つまり、家庭 SES にゆとりがある児童生徒が多い学校ほど、主体的・対話的で深い学びにもとづく授業が実施されやすい傾向を示している可能性もあるため、解釈には留意が必要である。

8. 家庭 SES と学力と学習状況

最後に、家庭 SES と学力と学習状況の関連についてみる。図表 3-21 と 3-22 は、小学校調査について、家にある本の冊数と平日の学習時間の別に、国語と算数の平均正答率を集計したものである（煩雑さを避けるため、蔵書数を4つに再カテゴリ化している。中学校も同様）。いずれの蔵書数のカテゴリにおいても、学習時間が長くなるほど正答率が上がる傾向が国語・算数ともに見られる。

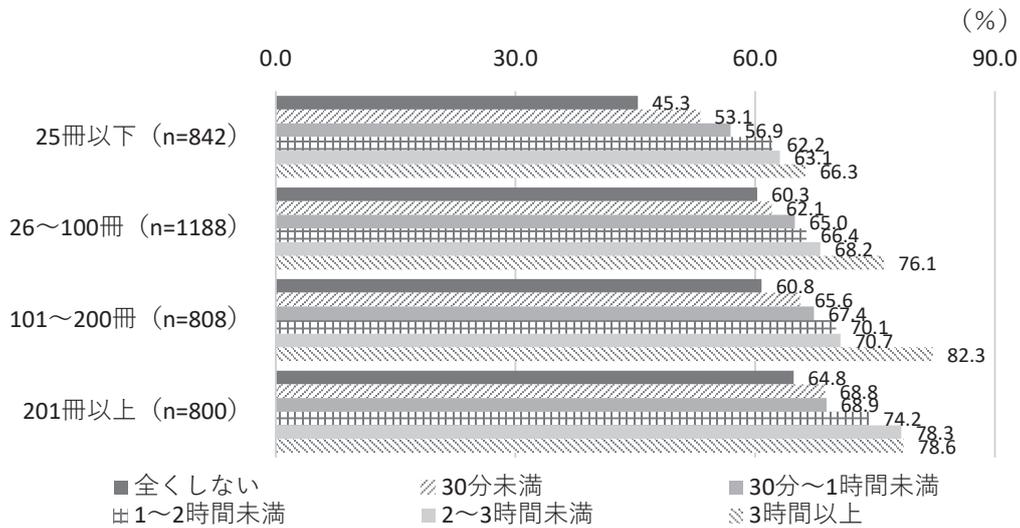
注目したいのは、蔵書数が少なく学習時間が

第3章 全国学力・学習状況調査データの分析 (1)

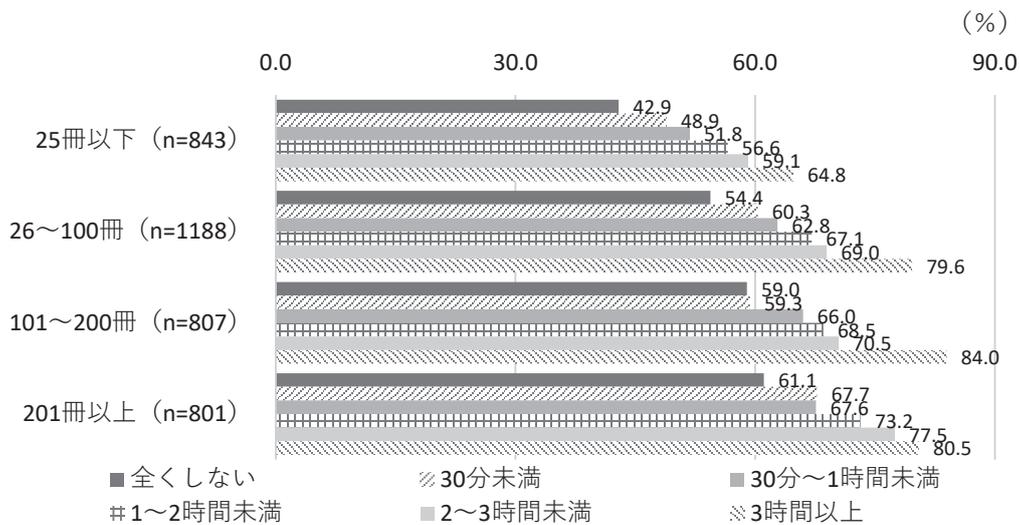
長いグループと、蔵書数が多く学習時間が短いグループの平均正答率である。国語について見ると、蔵書数25冊以下の児童のうち、学習時間が2～3時間未満の者の平均正答率は63.1%、3時間以上の者は66.3%である。一方、蔵書数201冊以上の児童のうち、まったく学習しない者の平均正答率は64.8%、学習時間が30分未満の者は68.8%である。つまり、蔵書数25冊以下の児童のグループは3時間以上勉強してはじめて、まったく勉強しない蔵書数

201冊以上の児童の平均正答率を上回る。さらに、蔵書数25冊以下の児童のグループは3時間以上勉強しても、30分未満しか勉強しない蔵書数201冊以上の児童の平均正答率を下回る。

算数の平均正答率も同様である。蔵書数25冊以下の児童のうち、学習時間が2～3時間未満の者の平均正答率は59.1%、3時間以上の者は64.8%である。一方、蔵書数201冊以上の児童のうち、まったく学習しない者の平均正答率は61.1%、30分未満の者は67.7%である。



図表 3-21 家にある本の冊数・平日学習時間別の国語正答率 (R5・小学校)



図表 3-22 家にある本の冊数・平日学習時間別の算数正答率 (R5・小学校)

調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究

図表 3-23 と 3-24 は、中学校調査について、家にある本の冊数と平日の学習時間の別に、国語と数学の平均正答率を集計したものである。やはり、学習時間が長くなるほど正答率が上がる傾向がどの蔵書数のカテゴリでも見られる。

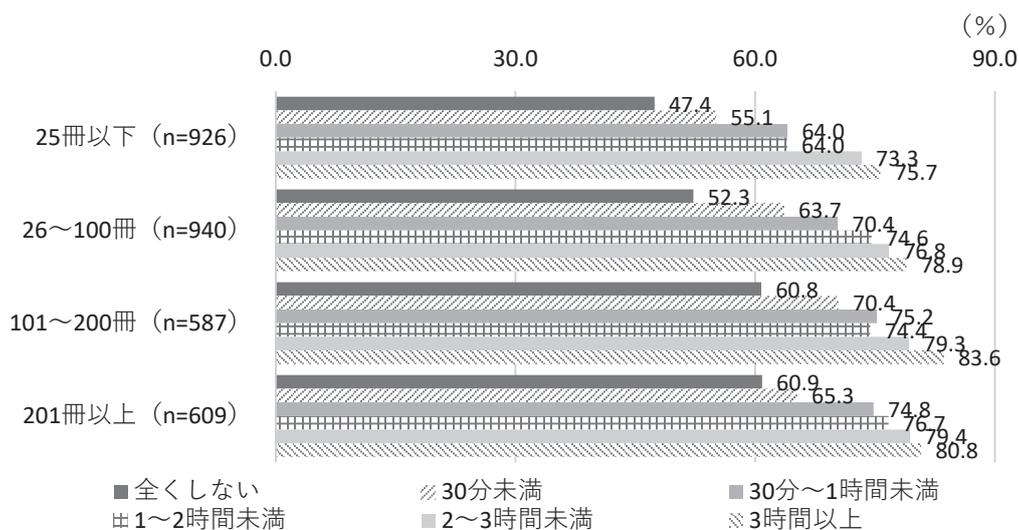
蔵書数が少なく学習時間が長いグループと、蔵書数が多く学習時間が短いグループの平均正答率を比較してみよう。国語について見ると、蔵書数 25 冊以下の生徒のうち、学習時間が 2 ～ 3 時間未満の者の平均正答率は 73.3%、3 時間以上の者は 75.7%である。対して、蔵書数 201 冊以上の生徒のうち、まったく学習しない者の平均正答率は 60.9%、学習時間が 30 分未満の者は 65.3%である。蔵書数が少なくても学習時間が長ければ、蔵書数が多く学習時間が短

い生徒に正答率で上回る。

数学でも同様の傾向が見られる。蔵書数 25 冊以下の生徒のうち、学習時間が 2 ～ 3 時間未満の者の平均正答率は 58.0%、3 時間以上の者は 59.4%である。対して、蔵書数 201 冊以上の生徒のうち、まったく学習しない者の平均正答率は 44.6%、学習時間が 30 分未満の者は 45.7%である。

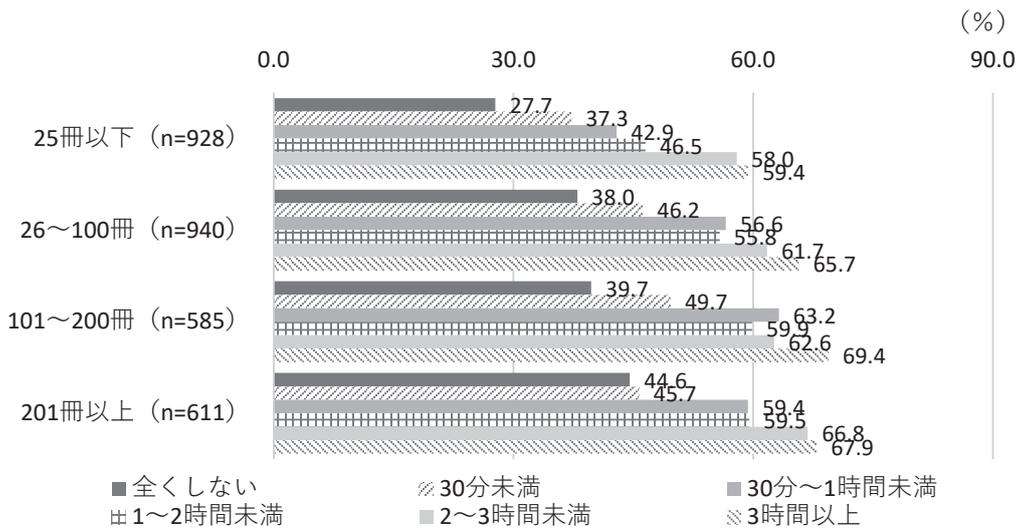
以上をふまえると、小 6 とは異なり中 3 の時点では、学力面での家庭 SES の不利を学習時間で埋め合わせられる余地が大きい。

ただし、中学校でもおなじ勉強時間で比べると、家にある本の冊数が多い生徒のほうが平均正答率は高くなっており、その意味で中学校でも家庭 SES の影響は残る。



図表 3-23 家にある本の冊数・平日学習時間別の国語正答率 (R5・中学校)

第3章 全国学力・学習状況調査データの分析 (1)



図表3-24 家にある本の冊数・平日学習時間別の数学正答率 (R5・中学校)

結果の詳細は省略するが、以上と同じ傾向は、学習方略（「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている」）や、主体的・対話的で深い学び（「授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」）でも見られた。学習の見直しや授業時の工夫などでも、小6に比べ中3では、学力面での家庭SESの不利を埋め合わせる余地が大きい可能性がある。ただし、中3においても、同じぐらい学習の見直しをしている者同士や、授業時の工夫に同程度取り組んでいる者同士を比べると、平均正答率には蔵書数による差が見られ、その意味で家庭SESの影響は残る。

9. 結果のまとめ

本章では、豊中市における家庭SESと学力などの関係を明らかにするため、全国学力・学習状況調査データを分析してきた。主な結果は以下のとおりである。

- 家庭SESにゆとりがあるほど教科の正答率が高く、家庭SESが厳しいほど教科の正答率が低い傾向がある。
- 家庭SESが厳しいほど、学習に向かいにくい生活習慣・学習状況がみられる傾向にある。
- 中3の時点においては、個人の努力（学習時間、学習の見直し）や、学校の授業（主体的・対話的で深い学び）で、学力面での家庭SESの不利を埋め合わせられる余地が小6より大きい可能性がある。ただし、中3においても家庭SESの影響は残る。

以上のような結果は、令和3年度（2021年度）以降の調査結果を通じて大まかに見られる傾向ではあるが、今後も同様の検証を続けることで、結果の安定性を確認していく必要がある。

もちろん、本章の冒頭で触れたように、以上の分析はあくまでも傾向である。家庭SESが厳しい児童生徒は教科の平均正答率が低い傾向にあったが、そのような平均的な傾向から外れる児童生徒も一人ひとりを見ると存在する。全体を俯瞰した際の格差の傾向をとらえつつ、格差を縮小するために教育政策や教育実践には何が求められるのかを、平均から外れるケースか

調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究

ら学ぶ姿勢が求められるだろう。第4章では学校単位で、第5章では個人単位でそのような視点にもとづく分析を行い、家庭SESによる不利を克服するためのヒントを得ることにしたい。

【参考文献】

文部科学省, 2017, 『小学校学習指導要領（平成29年告示）
解説 総則編』